

ぼくはどうしたらいいの？
～不適切行動から考える利用者の思い～

社会福祉法人蓬莱会 こどもデイサービスひまわり
理学療法士 伊藤光彦

1. はじめに

社会福祉法人蓬莱会こどもデイサービスひまわりでは、総合支援学校に通うお子さんを対象に、お子さんの持つ特性や能力に合わせて、小集団から集団での生活を中心に療育を提供するクラス、集団生活を見据えた個別療育を主体とするクラスの2クラス制での療育支援を提供している。集団色の強いクラスを利用されるお子さんの内、集団での生活を見据えて経験を積み重ねていく必要がある中で、その特性から一足飛びに集団生活を送るには課題の多いお子さんに向き合う中での試行錯誤や、実際に感じられた事について報告したい。

2. 対象児童について

○氏名:A 君

○学年:支援学校高等部1年

○診断名:自閉症スペクトラム障害

○得意な事:写真や数字、イラスト等のマッチング

人の顔や名前を覚える事

足音や作業の音から誰が扉の外にいるのかが分かる

他者からのリアクションを引き出す事

ドライブ中に見える店舗の看板を覚える事

○苦手な事:初対面の人や初めての活動等、経験のないもの

予定の変更

夏休みや冬休みといった生活パターンの変化

年度替わりのクラス替え等の環境の変化

すぐに思いが叶わない場合に折り合いをつける事

制止される事

○こだわり:自分の行動に対する他者の反応が意図しないものであった時、意図通りの反応が得られるまで同じやりとりを続ける。

衣類(肌ざわりや、濡れ・汚れを気にして着替える。)

3. 現在の様子

基本方針:捲り式のスケジュールを確認して見通しを得た上で、納得して過ごすといった事や、楽しみをモチベーションとしながら食事や課題、余暇を過ごす。

集団の場合:食事・おやつ・課題に関しては、集団生活を見据えて、必要に応じてパーテーションを活用しながらではあるが、個室ではなくフロアで取り組む。スケジュールから情報を得て、楽しみまでの見通しを持って取り組む事で、途中で離席

する事無く最後まで取り組む事が出来る。

余暇の場：安心を保障する目的で個室に入って過ごしている。個室では、主に職員と一緒にタブレットを視聴し、それぞれの職員とのやり取りを楽しみながら過ごしている。時折、各フロアで他児童の支援にあたる職員との関わりを求めて訪ねて行き、コミュニケーションをとる事もある。その場も、本人の思いを受容するための大切な時間ともなっている。

4. 本児の支援にあたっての課題

③では、本児の良いところ・できるところに着目して記載した。しかし、安心して集団生活を送る上で妨げとなってしまう問題・課題も当然ある。その問題・課題として特徴的な事が、「他者からのリアクションを引き出す事」であり、いわゆる不適切な行動として表面化する事が多い<下記表①>。職員や児童を含む集団の中で過ごそうと、本児なりに他者へと働きかける際に不適切行動が多く見られ、本児や他者の望む安心には繋がりにくいといった現状がある。そのため「集団の中の個」から脱する事ができず、集団で過ごす事に対する安心を得る事が難しい理由の大部分を占めていると考える。「他者からのリアクションを引き出す事」について考えると、つまりは自分を見て欲しいという本児なりの注意喚起の手段であったり、自身にとって利のある相手かどうか、どういう反応をするのかを探る為の試し行動の一つでもあるのではないかという事が考えられた。

	カードを投げる	扉を蹴る	奇声	他害
自身のクラス	○	×	○	○
余暇の個室	×	○	○	△
廊下	○	○	△	○
プレイルーム	×	×	×	△

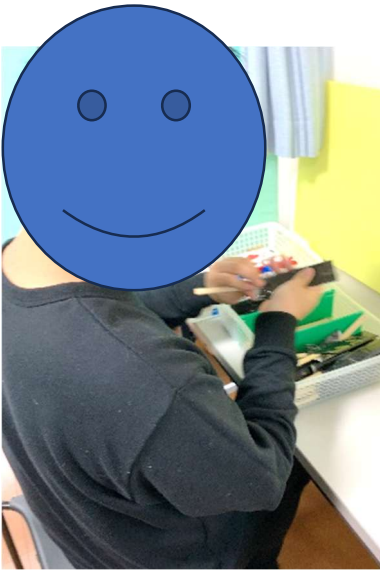
<表①：不適切行動について　○…頻繁、△…制止に起因、×…稀>

中でも、他害や奇声に関しては職員・児童を問わず、本児が好意的な相手もしくは本人の好ましい反応を見せた事のある相手をターゲットに定め、その相手が目に入ると直接的な行動と直結してしまう傾向が強い。また、双方の安全のために、突発的に見られる不適切行動に対しては制止を必要とする場面もあるが、その制止についても思いを通す事が出来ない際の代替的な行動として他の不適切行動が引き起こされてしまうきっかけとなる事が多い。また、こうした不適切行動については、本人の強い衝動性も関係している事は言うまでもなく、本児及び他児童の安心と安全を保障するために、本児の近くでの見守りが必要となっている。

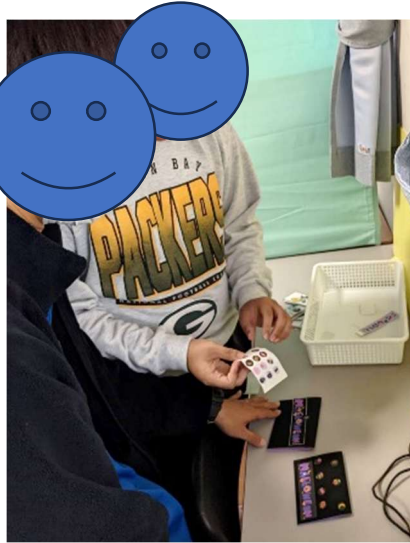
5. 支援の実際

集団の場：食事・おやつ・課題では、捲り式スケジュールを確認して見通しを持ち、自身が今取り組む予定を理解した上で行動する事が出来る<写真①②>が、来所

までの過ごし方の影響を強く受け、その日その日でコンディションが大きく異なる。そのため、注意力や集中力の散漫な日は、離席はしないものの、気になる職員の方へ振り返りコミュニケーションを求めたり、パーテーションを倒そうとしてみたりと、実にバリエーション豊かな様子を見せてくれる。そうした際は、言葉ではなくスケジュールを指さし、視覚的な手立てをもって「今何をする時間なのか」という事を伝えている<写真③>が、言葉遊びのような定型的なやり取りを繰り返し行う際は、変化の少ない定型的なやり取り(〇〇と言ったら△△と応える)を重ねる事で得られる安心を求めている様子も見受けられる為、応答した後で、視覚的なやり取りを行う様にしている。



<写真①: 自立課題>



<写真②: 一緒に制作>



<写真③: 予定の確認>

余暇の場: 余暇は個室で過ごす時間が長い。タブレットを視聴したり<写真④>、職員との言葉遊びに興じたりしながら、時折コミュニケーションカードを用いて、各フロアの扉をノックし、「〇〇さんお願いします。」と呼び、応答を待ち、一定のルールに沿ったコミュニケーションを行っている<写真⑤⑥>。しかし対象の職員が直ちに応答する事が出来ない場合も当然あり、そうした際には、「部屋で待つ」という意味のカード<写真⑦>をコミュニケーションカードへ貼り付け、「すぐには難しくても後で会いに来てくれる」という事を伝えている。実際に、扉前でいつまでも待ち続ける姿は減り、個室に戻ってタブレットを視聴しながら待つ事が出来る。また、事業所の構造上、十分なスペースがある廊下とは言い難く、児童・職員含む他者と廊下ですれ違うといった際に、他害等のトラブルが頻発していた。しかし、自発的に個室へ戻り他者が通過する事を待つことが出来る様にもなっている。個室の扉を蹴るといった不適切行動も、はじめは刺激の少ない個室で過ごす事で安心が出来る反面、足りない刺激を補う様に自己刺激として見られていたが、蹴る→注意を受ける(自分の行動に反応がある)→楽しい→もう一度やる、といった誤った経験を積み

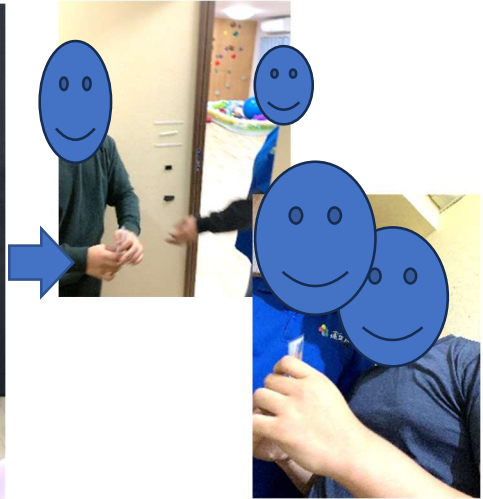
重ねてしまっている点も課題となっている。



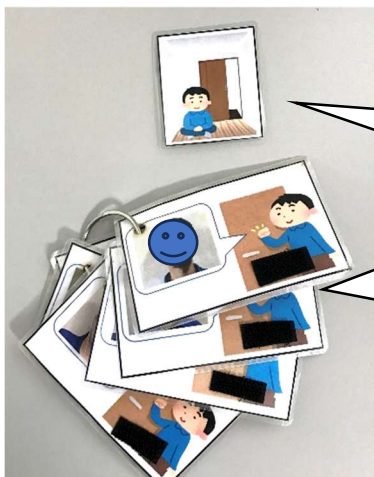
<写真④:個室での様子>



<写真⑤:相手を選ぶ>



<写真⑥:選んだ人と関わる>



今は対応できないという時に、
「部屋で待つ」事を示すカード。

会いたい相手のカードを見ながら整理し、実際に
会いに行きコミュニケーションをとる。すぐに対
応する事が難しい時には、上のカードをノックす
るイラストの上から貼り伝える。

<写真⑦:コミュニケーションカード>

6. 二年間の振り返り

私と本児との関わりが始まった二年前から現在を振り返ると、他者のカードを投げる機会が極々限定的な場面に限られるようになった事や、食事やおやつ、課題に取り組む際に終了まで離席する事が無くなった事、余暇中に会いに行きたい意中の人が直ちに応答する事が難しい場面でも、視覚的な手がかりを頼りにしながら、本人なりに折り合いを付けようとする姿勢が見えており、確かな成長を感じる事が出来る場面も増えている。この二年間で本児と一緒に挑戦した当事業所での支援内容を以下の<表②③>にまとめる。

スケジュール(写真とイラスト)		
<変更前> 形態:上から下 固定	<変更後> 形態:捲り式 持ち運ぶ	<変更の目的> ・不適切行動が多く見られて いた移動を省き、動線をシ

合図：トランジションカードを受け取り確認しに行く。	合図：声掛け・指さしにてカードに注目し、予定を理解する。	サンプルにする。 ・注意が逸れた際に、その場で直ちに確認が出来るようにする。
---------------------------	------------------------------	---

<表②：スケジュールについて>

コミュニケーション		
<変更前> ・言葉でのやり取りが主 ・いつ会いに行ける、今は待つ等の理解は曖昧で不安が増強されていた。	<変更後> ・コミュニケーションカードの導入 ・すぐに叶える事が難しい際には、「待つ」事を示すカードを貼る。	<変更の目的> ・言葉での理解が曖昧だった「いつ」「待つ」という部分に対し、視覚的に整理する事で理解、納得した上で行動できるようにする。

<表③：コミュニケーションについて>

主には見通しの面に対し、スケジュールの形態変更とコミュニケーションカードにて経験を積んできた。先述の通り、本児の確かな成長を感じられる場面は増えており、本児の安心に対して一役買い、支援に関して一定の効果はあったのではないかとと思われる。と、同時に、4の<表①>で記載した不適切行動は、減ってはいるものの、以前と同じ環境や状況に陥った際、同じ様な不適切行動として表面化し、本児の持つ特性や過ごしにくさに対する支援の難しさを感じた期間でもあった。

7. 継続的にみられる不適切行動

小学生時代から中学生時代の情報を振り返ると、現在でも同じように見られるものが多い。そして、その中でも、コミュニケーションの部分では、いたずらやちょっかいをかける、耳元で大声を出すといった不適切な方法による注意の獲得、またその行動から得られる相手の反応を楽しむといった様子は一貫して見られている。他害の面では、思いの叶わない場面等、本人にとって大きなストレスが加わる場面での爪たても、当事業所では年に1回2回と稀ではあるが、依然として見られる行動である。

そうした課題に対し、過去から現在に至るまでの支援の中で、当法人放課後等デイサービス事業所及び関係機関では、様々な形で支援を行ってきている。実際に不適切な行動が見られた場面での制止、また振り返り等の SST、不適切な行動をとってしまった際には反応しない事で本人にとって好ましいと思われる刺激を遮断する事、適切な行動ができた時の称賛等、言葉あるいは視覚的なツールを用いて関わってきているが、不適切な行動を強化してしまうものや、精神的な負荷を強いてしまい、手汗や脂汗などが吹き出し本児の混乱を助長したりと、いずれも理解や学習に繋がるような効果的な支援であるという結論には至らず、支援を考えるにあたり難渋するケースであったそうである。

本児は、人に興味があり、人をきっかけにして、本来取り組むべきものに対する注意・集中が逸れてしまう事から不適切な行動に繋がってしまう傾向が強い。また、過去には、年齢からく

る経験の少なさが故に、自分が求められている事柄に対する理解力が乏しい事や、そのための不安も強かったのではないかとと思われる。そして本児が見せる不適切な行動の中には、強い衝動性やこだわりといった特性上の問題も大きく関係している。大きな不安から逃れようと、不適切な行動をとり、人からの注目を集める。結果、制止や注意・叱責といった形であっても関わりは生まれ、少しの安心を得る事にはつながるのではないか。「ダメ」「やめて」という端的な言葉であればニュアンスも伝わるが、ポジティブなものではない為、時に過負荷となり、脂汗などの反応として現れ、混乱や不適切な行動を助長してしまう。過去の支援を振り返ると、いわゆる誤学習であるという見方もできるのではないかという所へ行きつく事は出来るが、では、どのように支援を具体化させていく必要があるのかと考えた時に、本児に対する支援の難しさを実感し、過去に本児の支援に携わっていた支援者の試行錯誤が容易に想像できるほどであった。

本児との関わりが深まれば深まるほどに、今日まで続く同じような不適切な行動にばかり目を向けるのではなく、本児に対する理解を深め、合理的配慮のもと、ポジティブな経験を積み重ねながら安心して過ごす事が出来る、といった基本に立ち返る事も意識すべきではないかという事に思い至った。

8. スモールステップよりもスモールステップで

私が本児の支援に携わる事となったのが、当事業所への異動がきっかけとなった事と同様に、それまでに良好な関係を築いてきた職員が異動したり、学校生活にも大きな変化が生まれた年度替わりの時期でもあった。発達障害を抱えるお子さんは、自身の周囲の環境の変化に弱く、そこから感じるストレスや不安が大きいとされる。それは本児にとっても例外ではなく、定期的に訪れるその変化も、本児の支援を難渋させる要因の一つとして大きな割合を占めているように感じられる。またその不安が大きければ大きいほど、人をきっかけにして安心を得るという本児の特性も相まって、自信を持てず、いわゆる不適切な行動として表面化してしまう事で誤学習を招き、経験から適切な学びを得る事にも繋がりにくいのではないかと考える。つまり、今感じられる本児の確かな成長へと目を向け、受容や共感、称賛といった基本的な部分を繰り返す。今、一見すると簡単に出来る様になった事でも、本児にとっては大きな努力を強いられ、前進と後退を繰り返しながら獲得してきたものかも知れない。その上で、様々な人との関わりを通じて一つ一つを認められる、褒められる、受け止められるという事を経験し、日々を過ごす上で感じる不安を、少しでも自信に変えていく事が出来る様、支援の在り方を考えていく事が重要ではないだろうか考える。

9. 終わりに

それでも、現在高校1年生である本児にも、「卒業」の時期は平等に訪れ、児童期のサービスから成人期のサービスへ移行しなければならない。これは本児に限らず訪れるとても大きな環境の変化である。その時、少しでも集団へ適応する事ができ、今よりも少しでも自信を持って穏やかに過ごす事が出来る様に支援していくには、やはり支援者としても研鑽を重ね、いわゆる「質」の高い支援を提供する事が出来る支援者となっていかなければならないという事を感じている。また、チームでの支援の重要性についても、一緒に過ごす毎に強く感じる。毎回、

本児との関わりの中には学ばせていただく事が多くあると思うとともに、それはこれからも続くのであろうと直感的に理解している。これも本児に限った事ではないが、一支援者として、これからも、本児とともに成長していく事が出来れば大変嬉しく思う。

最後になるが、コンディションやタイミングは大切でも、短い時間ではあるが、＜写真⑧＞の様に、クラスの児童と一緒に笑い合いながら過ごす事も出来るお子さんである事をお伝えしたい。家庭でも、当事業所や学校等で関わる様々な支援者の名前を嬉しそうに教えてくれる事が増えたと教えていただいた事がある。近い将来、こうした光景が当たり前になる様、これからも日々丁寧に向き合い、より良い支援を提供する事が出来ればと思う。



＜写真⑧：集団の中で談笑する A 君＞

10. 謝辞

本報告を行うにあたりまして、A 君、並びに保護者様、チームでの支援に尽力頂いている当事業所職員、また過去に A 君と一緒に過ごし、A 君の支援をご担当頂きました支援者の皆様、この場を借りて御礼申し上げ、謝辞と致します。